

特集

『創業者に聞く』

谷口奈保子さんロングインタビュー

第3回

前回の特集は『働く場所』として、おかし屋ぱれっとの誕生とスリランカレストランについてお届けしました。続く今回は『暮らす場所』についてお届けします。

これまで、2回に渡りお送りしてきた特集『創業者に聞く』ですが、第3回目となる今回は、グループホームを始めとした暮らしの場づくりについてお伝えします。

●まずグループホームを始められた経緯を教えてくださいませんか？

かねてから、「住まい」は障がい者の自立のために必要だと考えていました。当事者の親御さんからも住まい設立を望む声が多く挙がっていたので、当時の関係者とともに、意見を交わしながら何とか設立に漕ぎつけたのですが、いざ始めてみると、「うちの子にはまだ無理です」「いざというときにあれば安心と思って・・・」など意外に消極的な反応が多かったのを覚えています。今でも同じ側面があるかも知れませんが、当時は今以上に親が子どもから離れられず、社会に押し出すことができなかったのです。私は今まで話してきたようにおかし屋ぱれっとを始めた時からもっと障がいのある人たちを社会全体で見守る必要があると感じていました。そこで、発想の転換をしたのです。障がい者は社会から離れて家族や施設で守られる存在ではなく、社会に押し出していく、社会の中で生きていくことが重要だと考えたのです。話が前後しますが、そのために、1990年代後半～2000年代初頭まで、アメリカへ何度も視察に行きました。インターンとして現地に長期滞在をし、勉強もしました。そしてそこで学んだことがその後のぱれっとに大きな影響を与えることになったのです。1993年にえびすぱれっとホームを設立した当時の日本では、住まいというとまだまだ大型の施設が中心でした。教育も働く場所も暮らすのも、余暇でさえもその中で完結するような運営をされていると

ころが多く、とても社会に押し出すという流れでは無かったように思います。しかしアメリカでは同じ時期、反対に200人もいる大型施設を閉じようと動いていたのです。

現地で見学した施設は地域の中に10年かけて入居者の新しい住まいを探し、その大型施設の閉鎖を実現しました。支援者と2人で地域に出て暮らし始める人もいれば、地元の夫婦に同居人として受け入れてもらった人もいました。支援者は、障がいのある人が朝仕事へ行くための送り出しの時間と、仕事から帰ってくる時間に住まいにいて、サポートができれば公的補助が出る仕組みになっていました。もちろん友達やガールフレンドを家に呼ぶこともできるのです。健常者が住むアパートの横に同じ建物で障がいのある人が住める専用の住宅もありました。

こうして私は障がいのある人にとって、グループホームと自宅だけではなく、様々な住まい方があることをアメリカで学びました。グループホームもちろんありましたが、入居できる障がい者は4人まで、「5人以上集まれば、そこは施設だ」という考え方でした。

しかし日本では、とにかくこうした少人数の住まいづくりはまだ例が少なく、補助金の問題もあり渋谷区と何度も言い合いになりながら必要性を訴え、検討を重ねました。その中で、当時まだ渋谷区には無かった「緊急一時保護事業」をグループホームに併設して受託、運営費を捻出する上での苦肉の策でした。また、行政だけではなく、地元の企業や地域住民の協力を得ることも重要でした。なぜなら、渋谷という大

都会では、土地や建物を自前で用意することは不可能で、賃料もとても高かったからです。

●運営していく中でたいへんだったことはありますか？

今もそうですが、グループホームで働くスタッフは本当に大変だと思います。現場の支援もさることながら働く時間帯や休みの日が固定ではないので調整することが難しいのです。昔はアルバイトもほとんどいなかったんで余計大変だったと思います。今は経験豊かなアルバイトスタッフも多く、大いに頼りにされていると聞いています。加えて、親からの自立だけではなく、共同生活というのは自我が出るためサポートも難しいところがあります。パニックを起こすこともあるし、興奮して思わず壁に穴を開けてしまう入居者もありました。食事に関してはアレルギーなどはもちろん把握していましたが、偏食もあり、気に入らないと食べずにそのまま捨ててしまう人もいました。そのことについて私は、丁寧に作ってくれた人に失礼だと伝えて、捨てる前に食べられないことを教えてほしいと話を何度もしました。

えびす・ぱれっとホーム
余暇プログラムの様子



●入居者の変化やグループホームを始めてよかったこと等があればお聞きしたいです。

始めてよかったというよりは、当時は必要だったから創ったと記憶しています。運営していく中で気づいたのは、障がいのある人を社会に押し出すことと、もうひとつとして、親や家族の“レスパイト”（休息）

が必要だったということです。今では当たり前になりつつありますが、親が子どものケアから開放される時間が必要だと感じたのです。その点アメリカは先進的で、3日間レスパイトの時間をもらい、子を預けて旅行に行くことが浸透していました。そこで渋谷区でも行なってほしいと行政に訴えましたが、また驚かれ反対されてしまいました。そしてこれについては当事者の親の同意を得ることも困難でした。頑なに『自分たちで見られますから緊急でないかぎりその必要はありません』と断られてしまったのです。それでも必要性を訴え、勉強会も当事者を交えて何度も行ないました。そうして、グループホーム開設と同時に渋谷区から受託した緊急一時保護事業にレスパイトの利用をようやく認めてもらったのです。

その後も住まいの選択肢の発想を求め、フィンランドやノルウェーなどにも行って勉強を重ねてきました。再びアメリカの研修に行ったときは、私の滞在期間中に今の理事長である相馬さんにも声をかけて渡米してもらいました。

●障がいのある人とない人が共同生活するための事業「ぱれっとの家 いこっと」(シェアハウス)を始めたきっかけは何ですか？

ぱれっととは常に「選択肢」を作ってきたというお話をしてきました。住まいの話でもそれは同じで、1993年に設立したグループホームは、大型施設しか無かったところに、地域に少人数で暮らす住まいという選択肢を増やすことが出来たと思っています。現に今はこのグループホームが全国的に選択の主軸になりつつあることを見ても、大型施設から地域へという流れは確かに出来たのだと思います。でも私は、もう一歩先にもっと障害のある人たちが社会の中で自由に暮らせる選択肢があるのではと考えていました。本当はグループホームを立ち上げる時に、できれば障がいの無

い人も同じ住民としてともに暮らせるアパートのような場所を作りたかったのですが、さきほど話したように賃料の高い恵比寿にあって、行政の補助金を充てないと運営ができないという大きな課題があり、ひとまずグループホームにしたという背景があったのです。

二〇一〇年に開設した
ぱれっとの家 いこっと
(現えびす・ぱれっとホーム)



一方、就労の分野でも、障害者雇用という枠組みにより、障がいのある人たちが一般企業で働きやすくなりました。企業で働く人にとっては、障がいのある人だけではなく健常者と暮らすことで、より社会での自立を実現しやすくなるのではないかと考えました。それが「いこっと」の発想につながっています。いこっとを作るときは、1年ほどかけ、障がいのある当事者や家族、建築の専門家、ボランティアも交えて何度も会議を行ないました。そのチームの中から、初期の入居希望者の手が上がり、人間関係づくりや支え合いを学ぶ場所にするというコンセプトで名前も自分たちで考えてつけました。ところがいこっとを始めて2年くらいで壁にぶつかってしまいます。健常者の仕事が忙しく、帰ってくる時間が遅く朝も早く出かけてしまうため、中々入居者同士が顔を合わさなくなってしまうのです。それでも始めた頃は、いこっとと一緒に創った人たちやたまり場ぱれっとのメンバーが入居していたので、多少顔を合わせなくてもコンセプトが失われることは無かったですが、5年ほどの間にそのメンバーのほとんどが入れ替わり、その後恵比寿という立地の良さもあり、いこっとの理念に共感してくれる人というより

も、利便性を求めた一般の入居者が増えていきました。

元々障がいのある人も含めて、入居者同士の交流をメインにイメージしていましたが、すれ違いが増える中で運営していく難しさを痛感しました。まだまだ日本ではアメリカのように、専門職ではなく、一般の人と障がいがある人が一緒に住むという、多様な暮らしまで至っていないのが現状なのだと思いました。住まい方もそうですが、これは「働き方」の問題でもあったと感じたことを覚えています。

そんな中で、2016年ごろだったと思いますが、長く恵比寿に住んでいた障がいのある方がグループホームに入りたいとぱれっとを訪れたことがありました。その人は企業で働いていたこともあり、ご家族を含めてぱれっととのつながりも深い方だったので、グループホームではなくいこっとを勧めました。親御さんは初め心配・・・というか猛反対していましたが、この人ならきっと大丈夫だろうと皆で背中を押しました。何よりご本人がいこっとを大変気に入って、ここで暮らしたいと願ったのです。反対されていたご家族もその姿を見て納得されていました。様々な課題があって、昨年「ぱれっとの家いこっと」は「えびす・ぱれっとホーム」に事業変更しましたが、今でもその方は住まれ、変わらずマイペースで生活を楽しんでいます。



次回でこの特集は最終回となります。国際交流事業 PIJ（ぱれっと・インターナショナル・ジャパン）とこれからのぱれっとに向けた創業者からのメッセージをお届けします。

（おかし屋ぱれっと武井・山元）